

平成 21 年 5 月 21 日現在

研究種目： 基盤研究 (C)
 研究期間： 2006~2008
 課題番号： 18520213
 研究課題名 (和文) トポス「水の精の物語」の身体論的研究
 -ドイツ・後期ロマン派以降を中心に-
 研究課題名 (英文) Körperpoetische Betrachtungen über "Wasserfraugeschichte" als Topos
 - seit der späten Romantik -
 研究代表者 小黒康正 (OGURO YASUMASA)
 九州大学・大学院人文科学研究院・准教授
 研究者番号：10294852

研究成果の概要： 本研究は、ホメロスからゲーテ、クライスト、ドイツ・ロマン派 (ブレンターノ、フケー、アイヒェンドルフ等)、ハイネ、アンデルセンを経て 20 世紀ドイツ文学 (リルケ、カフカ、トーマス・マン、バッハマン等) に至るトポス「水の精の物語」を身体論的観点から考察した。その際、近代における水の精の歌の復活と消失の問題に集中的に取り組み、同問題の背後にある「視覚と聴覚の弁証法」の実相と意味を明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,000,000	0	1,000,000
2007 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	570,000	3,470,000

研究分野： 人文学
 科研費の分科・細目： 文学・ヨーロッパ語系文学
 キーワード： セイレン、ウンディーネ、ローレライ、ゲーテ、
 クライスト、ロマン派、ハイネ、アンデルセン

1. 研究開始当初の背景

水の物質性とポエジー言語の特殊性との間にある種の根源的連続性を看取した者は少なくない。例えば、ホーフマンスタールは『ある手紙』(1902 年)にて、自らの文学活動を断念したチャンドスが死に際のネズミから「無限なるものへのまなざし」を見て取り、「生と死の、夢と覚醒の流動体 (Fluidum) が、一瞬、被造物へ流れ込む」感覚を契機に、新たなポエジー言語の模索を始める姿を描く。ユングは 1934 年の論文で、ゲーテの詩

「漁夫」を援用しながら、「ニクセは、アニマと名づけられた妖しい女性的存在のより本能的な前段階」と述べ、水と無意識の根源的な連関を世に問う。同様に、水がしばしば神話的形式を用いながら我々の中に深い感情を蘇らせ、ポエジーとして結晶化することを、バシュラールは『水と夢 物質の想像力についての試論』(1942 年)にて主張する。また、以上の者たちに先んじて、既に 18 世紀末に「最終的にすべてのポエジーは翻訳である」と述べ、ポエジーを「流動的」flüssig

と洞察したノヴァーリスの存在も忘れてはならない。

以上のような「水の詩学」は、「水の女の詩学」成立のための揺籃だった。「水の女」の文学的系譜に関する本格的な研究は、ハインツ・ポリツァーの論攷「セイレンたちの沈黙」(1967年)を嚆矢とし、その後1980年代に入り、アンソロジーが次々に編纂される中、主としてフェミニズムもしくはジェンダーの観点から考察が進み、同系譜は概ね性をめぐる二項対立の枠組みで理解されることになる。その結果、男性と女性の対立を核にしながら、人間と水の精、人間界と異界、陸と水、固定化と流動化、合理と非合理、父権制と母権制といったヨーロッパの思想や文学に顕著な二項対立、すなわち「両性の戦い」*Der Kampf der Geschlechter* が同系譜から読み解かれてきた。

以上の新たな潮流に対して、本研究はフェミニズム的・ジェンダー的視点を認めながらも、「水の女」の文学的系譜から比較的容易に看取できる「両性の戦い」にのみ終始するのではなく、その背後で繰り広げられる別の「戦い」を明らかにすることを目指した。同系譜にはそれを成立させる二つの大きな柱があり、一方が両性をめぐる二項対立的枠組みとして近年解明されながら、他方がいまだ明らかにされておらず、事実、近年の新たな視角でも読み解くことができないままになっており、結局、同系譜の全体像が見えないままだったのである。

以上のこれまでの研究動向に対して、本研究はヨーロッパ文学における水の精の系譜を人類の営為、とりわけ身体的営為が文学的に凝縮した伝承領域、すなわちトポス「水の精の物語」とみなし、その濃密な文学空間を主たる考察対象とした。他方の柱とは、すなわち同トポスの背後に存する「見ること」と「聞くこと」をめぐる身体論的展開であり、別言すれば、「視覚と聴覚の弁証法」であり、詰まるところ「目と耳の戦い」に他ならない。言うまでもなく、文学がことばを介するかぎり、そこに「身体」が直接反映されえない。しかし、ことばを介するからこそ、ことばのプリズムを経て、「身体」が「身体性」として文学的言説に沈殿し続けることがある。この顕著な例をヨーロッパ文学における水の精の系譜に認めるとき、水の精をめぐる身体論的研究が成立する。従って本研究は、フェミニズム的・ジェンダー的観点によって考察が深められた「水の女」の女性性を踏まえながら、水の物質性とポエジー言語の特殊性の連関を新たに繙くこととなった。

本研究の先行研究である「トポス〈水の精の物語〉の身体論的研究—視覚と聴覚の弁証法—」(平成15-17年度科学研究費補助金・基盤研究(C)、研究代表者:小黒康正)は、

以上の研究を踏まえた上で、ホメロスからゲーテを経てドイツ・後期ロマン派に至るまでの変遷を考察の中心に据えて研究を行った。しかしながら、当初の予想を反して、同研究はかなりの深まりと広がりを見せ、後期ロマン派以降については、十分な研究結果を得ることができない状態にあった。

2. 研究の目的

このような先行研究の不備を補填しながら、その完成を目指したのが、本研究である。従って、水の精の歌が多様に展開する後期ロマン派の文学を考察の中心に据えることとなり、具体的には、

- (1) プレンターノ『時計職人ボックスの不思議な物語』
- (2) フケー『ウンディーネ』、
- (3) クライスト『水の男とセイレン』、
- (4) 「ローレイ伝説」
- (5) アイヒェンドルフ文学

を主たる考察対象とし、個々の論述がそれぞれ独立しながらも、同時に連関するようにも配慮した。なお、ホメロス『オデュッセイア』、バラケルスス、ヴィーラント、ゲーテを前史として踏まえ、アンデルセン、リルケ、カフカ、トーマス・マン、バッハマンらによるその後の展開を常に留意したことは、言うまでもない。

3. 研究の方法

本研究は、(i) 文献学、(ii) 身体論、(iii) ジェンダー論、(iv) トポス論、以上四つの研究方法もしくは観点到に特に留意した。

(i) 個々の物語の分析を通じてひとつの巨大な「物語」の構築をめざす本論にとって、いずれの考察対象に対しても、文献学的方法を駆使した精密な読解を心がけることは、基本的な作業であり、考察の大前提であった。

(ii) ひとつの巨大な「物語」が構築される際に個々の物語を結び合わすいわば結節点が、「視覚と聴覚の弁証法」である。別言すれば、「水の女」の文学的系譜の背後には、「陸の男」に対する「水の女」の誘惑手段をめぐる、「見ること」(視覚的誘惑)と「聞くこと」(聴覚的誘惑)をめぐる展開があり、詰まるところ、「目と耳の戦い」が存する。こうした展開によって人類の身体的営為が文学的に凝縮した伝承領域が形成されているだけに、身体論的観点を欠いては、同系譜の全体像を明らかにすることはできない。

(iii) トポス「水の精の物語」の実質的には、「水の女」の文学的系譜に他ならない。個々

の物語は多様な展開を示しながらも、水を出自とする異界の女性が陸に住む人間の男性を誘惑もしくは魅了するという点で共通するからである。時にはニクスやマーマンも登場するし、そもそも世界で最も古い人魚像は男の形姿を有するが、物語においては「水の男」が主人公となることは極めて少ない。総じて一家の主や水の世界の統治者としての役割、つまり支配者としての現実的な役割を担う「水の男」は、非現実的な異界の物語にはそぐわず、物語そのものを形成する力を持たない。結局のところ、異界の女性としての「水の女」が人間の男性としての「陸の男」を誘惑もしくは魅了するという「誘惑物語」こそ、トポス「水の精の物語」の核心をなす。以上の観点を深め、そして広げる為にも、本研究はジェンダー論的観点にも立つ。

(iv) また本研究は、文学的なトポス論を重視する。元来は場所を意味するギリシア語τόποςは、アリストテレス以来、論述形式あるいは論題の貯えられている「場所」を意味してきたが、E.R.クルツィウスによってヨーロッパ文学の中で伝統的に用いられ続ける「常套句」として捉え直された。クルツィウスはその際、使い古された古代の「常套句」が数百年あるいは千年以上の歳月をへて近代もしくは現代の文学作品のなかで新たに若返る現象を指摘する。クルツィウスにとって、「原初的な魂の世界と文学的トポスとの関係」は深く、そして文学的な模倣と創造の営みは分ち難い。以上のトポス論を拡大解釈するならば、古代のテキストは多少の変容を蒙りながらも、原型を失わずに現代に蘇り、新たなものを吸収し、増殖し、再び原テキストに戻っていく。つまり、循環運動の中で永続的に増殖を続ける営みの「場所」を形成する。本研究に即して言えば、ホメロス『オデュッセイア』におけるオデュッセウスとセイレンたちの遭遇を嚆矢とする「陸の男」と「水の女」とのジェンダー論的かつ身体論的対峙の濃密な伝承空間が、ひとつの物語、ひとつの「場所」と化す。

もっとも、本研究は実質的に「水の女」の文学的系譜を扱うという点で、一般的にはモチーフ研究と称せよう。但し、本研究が敢えてモチーフという言葉を用いないのは、モチーフの単なる影響関係史よりも、「水の女」の文学的系譜を通じて新しく立ち上がってくるポエジー言語そのものに強い関心を示すからである。同系譜は、概ね文学一般にもあてはまることだが、「他者」を「自己」の言語に取り込み、未知なるものを既知なるものに変換することで、物語という体裁をなしていく。もっともこうした言語

化によってすべてが表現可能とはならず、むしろ言語外経験を言語化する際の矛盾が露わになることも少なくない。文学とは、言語体系の編み目をくぐり抜ける「他者」を言語的に捉えようとする弛まぬ挑戦に他ならない。このような言語的挑戦は見方によっては「他者」の周辺をめぐる「堂々めぐり」の観をなす。しかし、内実は螺旋状、もしくはそれ以上に複雑な展開をとげ、「自己」と「他者」の境界という「場」において、新しいポエジー言語が次々に立ち上がってくるのである。以上のようなポエジー言語論を踏まえた文学的トポス論に、本論は立脚する。

4. 研究成果

上記研究目的欄の研究対象に合わせて研究成果を述べると、概ね以下になる。なお、研究対象の前史も併せて付言しておく。

(0) ホメロス『オデュッセイア』にて示されるとおり、古代ギリシアのセイレンをめぐる記述では誘惑手段としての美しい歌声が重視されていたが、古代ギリシア文化とキリスト教文化が混淆していく過程で歌うことのない美しい水の精が登場し、民衆本のメルジーナやウンディーナをめぐる伝説が示すとおり、視覚のみを重視する伝統が形成される。こうした伝統は意外なほど長く続き、特にドイツ文学では、近代においても継承される。しかしながら、1778年、ゲーテのバラード「漁夫」において水の精の歌声が独特の屈折を伴いながら復活すると、ドイツ・ロマン派によって美しい姿と美しい歌声を併せもつ水の精が多様に創作され、トポス「水の精の物語」における「妙音の饗宴」が形成されていく。

なお、ゲーテの「漁夫」において初めて、歌声がもたらす「音の流れ」は神秘に満ちた「水の流れ」となり、流れは暗い水底、人間の内奥、見方によっては、無意識へと向かい始めることも見逃してはならない。こうした新たな展開を受けて、認識できぬ未知なる「他者」や悟性の光が届かぬ「異界」は外ばかりではなく内にも存在し、「自己」の中にこそ真の「他者」が宿るという逆転の構図も生じるに至り、ロマン派における「水の女」は「水の深さ」が「心の深さ」となる複雑な「他者」経験の表象となっていく。

(1) ドイツ文学に新たな「他者」表象を促したのは、18世紀から19世紀にかけて生じた音楽美学的なパラダイムの転換であった。とりわけロマン派が抱いた「絶対音楽」の理念によって、「水」はあらゆる拘束からの解放を目指すポエジー言語を生みだし、物質的想像力を喚起する元素となり、併せて「水の

女」は音楽の根源的魔力を表す誘惑の歌をうたいだす。以上のような「水の詩学」と「水の女の詩学」を踏まえ、ブレンターノとグレスの共作『時計職人ボックスの不思議な物語』(1807年)が問題にする審美的な「音の流れ」に、すなわち「自然の泉」から湧き出たはずの「水の流れ」に聴き耳を立てたとき、聞こえてきたのは、一方で時計の機械的な響きであり、他方で「奇妙な発作」を引き起こす曲目、とりわけセイレンのバラードであった。『時計職人ボックス』がゲーテ「漁夫」を取り込むとき、ロココ的・修辞学的言説による「ごった煮」が炊きあがるだけに、取り込みはいわば羊頭狗肉となってしまう。「水の女」は相手を陶醉させる誘惑の歌を「歌い語った」にもかかわらず、実際には内面描写の深層に潜り込まず、修辞学的な言説の表層を泳ぎ回るに留まったのである。もっとも、音楽が市民的秩序を脅かすアンティポードとなる『時計職人ボックス』では、別様の潜り込みがあったことも見逃せない。それは、「音の流れ」にのって彷徨う「第二のオデュッセウス」の脳内でさいはての闇へと下る「第二のオルフェウス」の冥府行であった。但し、前者が時計職人であり、後者が医者であるだけに、それはあまりにも諧謔的かつ風刺的な冥府行だったのである。「音楽の国」ドイツにおいて、言語ならざる「音楽」の受容を言語化しようとする文学的挑戦が初めて諧謔的になされたとき、アンティポードの闇から出現したのは、苦悩する内面的な音楽家の顔ではなく、「分裂の世紀」に相応しいヤヌスの相貌だったのである。

(2) 1811年に出版されたフケー『ウンディーネ』は「陸」と「水」の不変の融和に始まり、「陸の男」と「水の女」の永遠の結合で終わる。この新たな創作メールヒェンは、かつて物質存在を周辺化してきた人間存在がいまや汚れた古い魂の持ち主として逆に周辺化されていく中で、結末はウンディーネに対する人々の思慕がいかに大きいかを示す。喪失は人間存在の見果てぬ夢となり、古い魂による新しい魂の希求となる。こうしてフケーなりの「新しい神話」の模索は、「新しい〈魂の獲得物語〉」から「〈新しい魂〉の獲得物語」へと変わり、そして最終的に「〈新しい魂〉の喪失物語」へと更なる変容を遂げていく。失われた物質存在が人間存在の見果てぬ夢となり、不在はひとつの伝説と化す。こうしてフケーの創作メールヒェンで、「水の女」と「陸の男」との対峙よりも和解が、物質存在と人間存在との離反よりも融和が求められることで、「水の女」の文学的系譜は「戦い」から「和平」へと大きく変容したのである。

(3) 「言語」の側に立つ「陸の男」と「言語ならざるもの」から浮かび上がる「水の女」との「戦い」は、「水の女」の文学的系譜がフケー『ウンディーネ』において「和平」を極めたとき、背後に退いたかのように見えた。しかしながら、実は「和平」の極まりと同時に、新たな「戦い」の火蓋が切られたのである。それは、同じ1811年に、クライスト『水の男とセイレン』が上梓された時であった。

クライストの「セイレン」はうめき声を発するのみで、話すことができず、ましてや歌うこともできない。しかし、古代ギリシアにおいてセイレンは美しい声で「陸の男」を死へと誘い、また、ドイツ・ロマン派においてセイレンの後裔たちは美しい声と美しい姿で「陸の男」を魅了するだけに、古代より「陸の男」と「水の女」は、敵対関係であれ、友愛関係であれ、言葉を通じて相互に意志疎通が可能であった。だが、クライストの「セイレン」は、美しい歌声で言葉巧みに水底へと誘うことも、自らの出自を滔々と説明することも無い。問題は、「他者」に対してフケーのテキストが夢に倣う幻想的融和を、クライストのテキストが悟性に基づく言語的支配を志向するだけではない。そもそも「他者」の内実が異なる。「水の女」が、饒舌な物質存在ではなく、口の利けない女性存在として現れるとき、件の系譜は他者性の重心を「水の女」の物質性から女性性へと移していく。それだけに、新たな「セイレン」を敢えて「翻訳」するとすれば、「水の女」*Wasserfrau*ではなく、「水の女」*Wasserfrau*と表記しなければならない。

アンデルセン『人魚姫』(1837年)以降、トポス「水の精の物語」では、「水の女」と「陸の男」の言語コミュニケーションが根本的に揺らぎ、両者の関係は修復しがたい断絶へと陥っていく。但し、新たな「翻訳」可能性によって更なる文学的挑戦が促され、「水の女」をめぐる新しいポエジーが次々に立ち上がってくることも忘れてはならない。沈黙する「水の女」の物語が文学の表現媒質としての言語の原理的機能不全性を浮上させるのである。クライスト『水の男とセイレン』はこうした新たな状況のまさに嚆矢であった。

(4) 数あるローレライ伝説の中でハインリヒ・ハイネのバラードがひときり際立つ所以は、二重の憑依にある。 「いにしへのメールヒェン」に取り憑かれながら言い知れぬ悲しみにくれる「私」がおり、この抒情的自我が語る。「メールヒェン」の中で憑依を受けるもう一人の人物がいる。こうした二重の憑依によって、ハイネのバラードは「私」による枠構造をつくり、メールヒェン伝承そのものを表現する。しかも、枠構造は独特の対称

構造を有しながら、その中で憑依の実相を示す。それは、新しい水の精の案出に他ならない。すなわち、ローライが「乙女」として美しい姿と美しい歌声を獲得し、新たな複合的誘惑を行使するのである。

(5) トポス「水の精の物語」における歌声復活がゲーテによって果たされ、「新たな展開」がフケーとハイネによって推進されたとするならば、「妙音の饗宴」はアイヒェンドルフによって代表される。アイヒェンドルフが何人よりも、量において水の精を自己の文学に取り入れ、質においてドイツ・ロマン派における水の精の「新たな展開」を自家薬籠中の物とし、結果的に独自の「妙音の饗宴」を催したことは間違いない。その独自性は、キリスト教的道徳原理と異教的官能原理との狭間で浮き沈む水の女として文学的営為が表象された点にある。敬虔な作者の意識において異教的官能原理がキリスト教的道徳原理によって封じ込められるにしても、そうした勝利が書かれるかぎり、「時折セイレンだけが／水底からいまだ浮かび出て／惑いの音にて／深い憂いを告げる」。告げられる「深い憂い」とは何か。それは単なる哀歌ではない。それは、表層では流謫の神々の嘆きを装い、深層では倦怠と瞑想をあわせ持つ憂鬱として現れる。芸術の靈感源と称されたメラコリーは、土星の資質の知的衝動として、アイヒェンドルフ文学において書くことを促す。事実、『予感と現前』はクロノトポスとして詩的存在者たちの「浮き沈み」を描き、『詩人たちと仲間たち』はタブローとして水の女から憑依を受ける四詩人たちの宿命をそれぞれ示す。やはり「書く」という文学的営為に携わる者は、常にセイレンの歌に曝され続けなければならない。詰まるところ、「水の女」の文学的系譜において質量ともに異彩を放つアイヒェンドルフ文学では、水底からの誘惑が「書く」ことの根源的契機となり、否定すべき対象が自己の創作基盤を培うという矛盾のもとでポエジー言語が立ち上がったのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 小黒康正、「1811年の「翻訳」論——フケー『ウンディーネ』とクライスト『水の男とセイレン』——」、日本独文学会「ドイツ文学」138号、188-203頁、2009年、査読有。
- ② 小黒康正、「トポス「水の精の物語」における妙音の饗宴——アイヒェンドルフ文

学をめぐって——」、九州大学独文学会「九州ドイツ文学」22号、1-31頁、2008年、査読有。

- ③ 小黒康正、「水の女をめぐる「翻訳」論 ホメロス『オデュッセイア』とフケー『ウンディーネ』」、九州大学独文学会「九州ドイツ文学」21号、33-57頁、2007年、査読有。

[学会発表] (計3件)

- ① Yasumasa Oguro: Frieden und Krieg von 1811 –Fouqués „Undine“ und Kleists „Wassermänner und Sirenen“– In: Asiatische Germanistentagung 2008 in Kanazawa, Kanazawa/Japan 27. 08 2008.

[図書] (計2件)

- ① 浅井健二郎編『ドイツ近代文学における〈否定性〉の契機とその働き』、日本独文学会研究叢書052号、73頁、2007年、査読無 [「メールヒェンのパロディー——「ハインリヒ・ハイネのローライ」(26-41頁)を担当]。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小黒 康正 (OGURO YASUMASA)
九州大学・大学院人文科学研究院・
准教授
研究者番号：10294852